



TITLE:

<雑録>京漢線ところどころ

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <雑録>京漢線ところどころ. 東洋史研究 1940, 5(3): 195-229

ISSUE DATE:

1940-04-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/145688>

RIGHT:

以施仁。玉兔西山。引慈雲而布潤。

わたくしは以上列舉した例から考へて、沙州・伊州地志殘卷の「素書形像」は「素畫形像」の誤寫に相違なからうと思ふ。然らば素畫とは何かといふに、清の錢大昕は潛研堂金石跋尾續卷三に、わたくしの第二に擧げた唐太和七年の碑を青蓮寺碑の名の下に著録して碑有素畫彌勒佛之語。按說文無塑字。唐宋碑刻。或作塼。亦俗。不若作素之爲得也。

と言つてゐる。而して陶齋藏石記の著者も、わたくしの第一に擧げた北齊天統三年の造像記の跋語の中に、この錢氏の説を引用して賛意を表してゐるのである。素畫の塑像であることは殆ど疑なからう。その畫の字は彩色を施す意である。わたくしが第三に擧げた李府君修功德記に「初坏土塗施布錯彩」とあるのは、そのことを尤も能く物語つてゐると思ふ。

注

- ① 小川博士還曆記念史學地理學論叢
- ② 史學雜誌第三十五編第十一號。但し博士はこの沙州・伊州地志殘卷を毎時も誤つてベリオ氏發見の沙州都督府圖經として取扱はれてゐる。

③ 同上第三十九編第六號

④ 同上第四號

⑤ 劍峰遺草

⑥ 慈恩傳卷十。いま藤田博士所引のまゝに従ふ。

(昭和十四年十一月五日東洋史談話會大會講演)

### 京漢線とところどころ

昨日北京を出發して豫定通り旅行に出ました。色々な事故の爲め、汽車は四時間近くも遅れて石家莊に延着しました。途中保定あたりからなごやかな新正月の春日和ががらりと變つて、一面の雪景色になつたのに驚かされました。石家莊も到る所水溜りがあつて十二日に雪が降つたとのことです。今朝十時五十五分そこをたつて順德に着きました。今日はよい天氣です。順德は河北省南部最大の町でなか／＼立派です。事變以後道制がしかれてから冀南道公署の所在地となつてをります。日本人は一千人といはれてゐますが、六割までは半島人とのことで中でも女が特に多いさうです。時間がないので夕方薄暗くなるまで城内をあちこち見て廻りました。有名な開元二十七年の道德經幢は随分荒れてはゐますが、碑で堂が造られて保存されてゐます。俗に西大寺といはれる天寧寺には元の趙孟頫の書いた碑があります。開元寺はこれに對して東大寺といはれ、唐の鐘離權の詩にもよまれてゐる所です。境内は荒れてゐますが、宋金元の碑がいくつも立つてゐます。元の世祖が何處か行幸した所の様で所謂俗語體の聖旨碑も二つありました。明日は午前中に邯鄲に向ひます。(昭和十五年二月十四日比野丈夫)

日支事變勃發により此の製鹽事業も中止され、其後日本軍の管理下に入つたが木材、水と共に支那人の珍重する鹽が手に入らぬのに苦しんで鹽盜人が續出した由なので、鹽務管理局では鹽警を置き、取締りを行ひ一方製鹽も行はれ初めた。

運城の町に山西鹽務管理局河東分局があるが、此の廟の西には鹽警の詰所があつて、若い支那の青年が銃を持つて監視をして居る。佈告があつた。

#### 第七號

山西鹽務管理局河東分局佈告

爲佈告事茲值春融正當鹽池工作始之除池下各商戶自應肅清閑雜人等以使工作

#### 京漢線とところどころ(續)

○昨日彰德に着いて夕方までに町を一巡り見てまはりました。仲々賑やかな町で城壁の中すきまのない迄に家のつまつてゐるのには感心しました。今朝は東南營街にある韓琦の祠堂をたづねました。相當に立派な廟で韓王廟といつて居ます。奥の正堂には韓琦の木像が祀つてあつて軒には光緒帝や西太后の書いた額がかゝ

進行再各歲事變各商戶内寄居逃難人民甚多茲限於三月三十壹日以前一律移出至非關鹽務人等嚴禁出入鹽池案關場產作業影響至爲重大仰爾商民人等一體週知其各凜遵勿違切切此佈

中華民國二十八年三月 日

局長

副局長

日本文の方は寫さず家の中に入ると鹽警の分隊長李忠斌君が居たので暫く話をした。鹽警の服裝は服色國防色、折襟で脚絆をつける。襟章には金の縁の中に鹽

警の文字肩章は我が國の巡查の如く横につてゐます前庭の西側に碑屋ともいふべき建物があつて、かの有名な袁錦堂記(文は歐陽脩、書は蔡襄)や宣和四年の年號のある榮事堂記などを始め大徳二年の韓魏王新廟碑その他幾つもの碑が立つてゐます。壁間には韓琦の撰並に書とある韓愷墓誌銘などが嵌め込んでありました。廟の鄰が韓琦の故宅で光緒の末年から中學校となつてゐるのが最近では軍の

つけ、鹽の文字と青エナメル塗り之星。

ボタンに鹽の文字が入つて居る。右腕に腕章をつけ、これにはマークと山西鹽務管理局鹽警第一大隊第四中隊第一臺肆號左の腕に銀金銀の三本の山型をつけ、胸に姓名を記した小布片を附けて居る。帽子は同じく國防色で、軍帽と同じ型である。この苦力は軍管理第四十工場產鹽公會鹽場工人許丙章といふ風な腕章をつけて居る。

これで廟及び鹽田の見學を終つたが、寺についての考證的な事及び鹽田に關する詳細はいづれ稿を改めての事と思つて居る。(完了) (昭和十五年三月五日記)

病院に使はれてゐます。頼んで見せて貰ひましたが中央の堂には明の彰德府知事陳九仞の筆になる大きな畫錦堂の額がかゝつてをり前庭の兩側には狎鷗亭と觀魚軒とがあります。……此等の建物は乾隆四十何年かに重修されたものゝ様です。彰德を發つて夕方新郷に着きました。皇軍入城二週年記念日のやうに思はれます。(二月十七日新郷にて日比野)

慶賀するに吝かでない。學界は清朝實錄の出版によつて潤された以上に本實錄の出版によつて潤されるであらうこと殆んど疑なきところ。序でながら、出資者は臨時政府、印刷は新民印書館に確定したといふ噂。(三、十、北京にて今西記)

### 會員動靜

小野勝年氏 去る昭和十二年十月以來外務省留學生として美術考古學研究の爲め北京に在つて研鑽中の處、任期満了し舊臘歸朝せらる。

中谷英雄氏 一昨夏應召、爾來北支の

野に活躍せられしが、今冬無事歸還、從前通り海南中學に奉職せらる。

小如龍雄氏 文學部副手より新設の京大人文科學研究所助手に轉任。

安部健夫氏 第三高等學校教授より京大助教に轉任せらる。

羽田 明氏 右安部氏の後任として第三高等學校へ。

堀井一雄氏 桃山中學校より高知師範學校へ轉じ、四月上旬赴任。

武田 豐氏 蒙古聯合自治政府民政部に就職、四月下旬赴任。

原 八郎氏 過去一年間本誌の東洋史

文獻目錄編纂の擔當者として盡力されしが、今春芽出度く卒業、蒙古聯合自治政府蒙疆學院に入學され、四月下旬入蒙。

### 東洋史本年卒業生

#### 論文題目

朝鮮塔婆建築史

近藤 豐

金代女眞族の漢文化攝取に關する

一考察 田中 整治

戰國秦漢社會の一側面考察

原 八郎

唐代の科擧とその社會的影響

藤原利一郎

唐朝中官領使考 六花 謙哉

### 京漢線とところどころ(續)

今朝順徳を發ち邯鄲に下車しました。細長くて狭くきたなくて面白い所ではありません。一時間程で城内

を一廻りしましたが、東北の方にある趙の武靈王の叢臺とか西門外の市橋などあまり感心したものではありません。藺相如の廻車臺といふ所が

あるさうですが見附かりませんでした。廟はあつても全く荒れてゐて何もありません。本當にカンタンです。(二月十五日、邯鄲にて日比野)